



*Общество японо-российских
студенческих обменов*

第31期 日本ロシア学生交流会 関東本部
報告書

第31期 日本ロシア学生交流会 関東本部
報告書

2018 年度幹事長挨拶

日本ロシア学生交流会代表
慶應義塾大学 2 年 太田就士

我々日本ロシア学生交流会が 1988 年に発足して以来約 30 年間、「ロシア」を軸に多様な交流活動を行ってきました。情勢の変化が激しい中、我々は「ロシア」という今でも日本であまり親しみのない国を知り、その魅力を日本人に伝えることをミッションとして活動してきました。毎年夏に行われるロシア人学生日本に招待して文化交流活動を行う訪日企画、日本人学生をロシアでホームステイとして受け入れていただく訪露企画が我々の掲げるミッションに対する一つのアプローチであり、弊団体が長年行ってきた大切な交流活動でございます。今年はノヴォシビルスクへは 6 名送り、リャザンからは 6 名のロシア人を受けいれました。

二つの企画は今年も成功し、無事に終えることができました。まずは、この企画を様々な形で支援して下さった全ての方に幹事団一同感謝申し上げます。

近年、ニュースにもロシアという言葉が頻繁に目にするようになってきました。これは日露関係が盛り上がりを見せている証拠であり、ロシアという国が今まで以上に注目されてきているということに違いありません。我々の日常生活でも少し意識して「ロシア」を探せば、簡単に見つかるようになってきました。にもかかわらず、日本人の大多数はロシアという国に対して今ですらソ連時代の「暗い」イメージを持ち、遠い国だと捉えています。ロシア人と関わったことがある人ならご存知だと思いますが、彼らはとても温厚で友好的、さらには日本が大好きな方が多くいらっしゃいます。多方面で彼らには学ぶことができ、国としての協力関係を築けることができたなら双方の国がさらなる国が発展することができる可能性があるにもかかわらず、マイナスなイメージが先行して彼らのことを知ろうとする姿勢にすらならないのはとても勿体無いことであり、悲しいことです。

「日本にもっとロシアを広めたい」、我々はこの思いに対してまずは日本におけるロシアに関わる人たちの横のつながりを強めることが大切だと感じております。また、今年ちょうど「日本におけるロシアの年」、「ロシアにおける日本の年」であったため、より一層この思いの実現に重点をおいて活動して参りました。一般人の方の参加も含めた、ロシア料理会の開催やロシア人留学生を積極的に集めて都内を散策する企画、ほかには関西のセミナー

キさんとの共同イベントの開催、ロシア関連分野就活促進シンポジウム開催などを行って参りました。

このように、少しでも多く、「ロシア」に触れる機会、ロシアに関わる人が集まることができる機会を増やそうと努力して参りました。我々の試みは、日露交流全体からしたら小さな一歩かもしれませんが。しかし、こういった我々の草の根の活動こそがいつか身を結び日露交流全体の促進につながると信じております。

最後に、日露学生交流会の活動を支えてくださったすべての方々に、今一度幹事団一同深く御礼申し上げます。

早稲田大学 政治経済学部

長與進教授

ロシア語をめぐる断片的な思い出

早稲田大学政治経済学部でロシア語を担当している長與です。ぼくがこのポストに就いたのは1991年4月のことですから、もう27年もロシア語を教えていることになります。ちなみにその年（1991年）の12月に、ソ連が解体しました。1985年以降にペレストロイカ政策がはじまったとき、多くの人がソ連の自由化・民主化に期待を寄せましたが（もちろんぼくも）、ソ連の解体という結果になるとは、だれも予測していなかったと思います（もちろんぼくも）。ソ連の解体は、だれにとっても「想定外」の出来事でした。

なぜロシア（語）に関心を持ったのかと、いまでも聞かれることがあります。ぼくの場合は、「ソ連」という国の歴史と文化への関心でした。ぼくは1948年生まれですが、1961年4月、中学校に進学した年に、ソ連が最初の有人宇宙飛行を成功させました。今から思うと意外かもしれませんが、1950年代後半から60年代前半にかけて、宇宙開発の初期段階で、ソ連は明らかにアメリカをリードしていました（アメリカが受けた衝撃を指す「スプートニク・ショック」という言葉があります）。最初の宇宙飛行士ユーリイ・ガガーリンの「地球は青かった」というセリフは、当時とても有名になりました（ロシア語の原文は Земля голубоватая.）。このあと彼は、ソ連の「宣伝大使」として世界中をまわり、日本にも来ました。当時ぼくが住んでいた名古屋でもパレードがあつて、喜び勇んで観に行きました。オープンカーに乗って颯爽と（とぼくには見えましたが）群衆の面前を駆け抜けていった彼の姿が、いまでも記憶の底に焼き付いています。ガガーリンは数年後の1968年、飛行機事故で亡くなりました。彼の死をめぐるのは、いまだにさまざまな憶測があるようです。著名人が「不慮の死」を遂げると、かならず「陰謀説」がささやかれる事情は、みなさんもお存じでしょう。

ロシア語を本格的に学びはじめたのは、大学（京都の同志社大学でした）に入ってからです。1970年代初頭のことで、当初は町中のロシア語講座に通い、大学のロシア語上級の授業にも出て（受講者はたしかぼく一人でした）、とにかく必死で勉強しました。でもその勉強が苦痛でなかったのは、きっとロシア語を学ぶことが性にあっていただけからでしょう。ぜひロシア語の勉強を続けたいと思い、幸い1974年4月に大学院（早稲田大学文学研究科ロシア文学専修です）に入学することができました。学部でロシア語を専門に勉強していなかつ

た人間が、大学院に進学するのは、いま思っても無謀だったと思います。最初の3年は、同僚たちの学力レベルに追いつくのが大変でした。

はじめて外国に行ったのは、1977年夏のモスクワ大学での短期語学研修（サマースクール）のときでした。もう30才近くになっていました（そのことを思い出すと、大学時代に（もしかしたらそれ以前に）気軽にロシア（とその他の外国）に旅行できるみなさんが、ほんとうにうらやましい。この可能性とチャンスは十二分に活用してください）。モスクワへの往路はシベリア鉄道を使いました。当時は横浜とナホトカのあいだに定期航路が通っていました。横浜の港でソ連船（たしか「ジェルジンスキー」という名前だったと思います。どんな人物かは、ネットででも調べてみてください）に乗ったとたんに、別の時間、別の空間、別の匂いに包まれたことを、いまでもはっきりと思い出します。学校で習ったロシア語がどれほど通じたのか、怪しいものでしたが、それでもロシア人と直接にコミュニケーションを取りたいという、強い気持ちに駆られていました。この気持ちがきっと「国際交流」の基盤になると思います。ぼくは来年（2018年）3月に定年退職します。みなさんのご健闘をお祈りしています。

目次

第1章 日本ロシア学生交流会について

- 1. 1 当会の沿革 2
- 1. 2 関東本部について 4
- 1. 3 これまでの主な活動 5

第2章 2018年度の活動について

- 2. 1 年間活動概略 8
- 2. 2 年間収支報告 8
- 2. 3 今後の展望 9

第3章 2018年度訪日活動報告

- 3. 1 訪日活動について
 - 3. 1. 1 企画概要 12
 - 3. 1. 2 交流都市について 12
 - 3. 1. 3 収支報告 13
- 3. 2 企画内容
 - 3. 2. 1 主な企画内容 15
 - 3. 2. 2 参加者 16
- 3. 3 報告
 - 3. 3. 1 各日の報告 17
 - 3. 3. 2 ディスカッション報告 21
 - 3. 3. 3 参加者感想 22

第4章 2018年度訪口活動報告

- 4. 1 訪口活動について
 - 4. 1. 1 企画概要 32
 - 4. 1. 2 交流都市について 32
- 4. 2 企画内容
 - 4. 2. 1 主な企画内容 34
 - 4. 2. 2 参加者 34
- 4. 3 報告
 - 4. 3. 1 各日の報告 35
 - 4. 3. 2 参加者感想 38

第5章 シンポジウム М е ч т а (ミチター)について

- 5. 1 ??? 46
- 5. 2 ???
- 5. 3 ???

第6章 補足

6. 1	カザン班について	48
6. 2	ロシア料理会について	49
6. 3	セーミチキ（旧関西本部）について	50
6. 4	その他の活動について	51

第1章 日本ロシア学生交流会について

1. 1 当会の沿革

1989年、ソ連を含む東欧諸国は激動の年であった。現地への渡航もままならない中、ソ連に赴き現地で同世代の学生たちと直接ひざを付き合わせて語り合おうと考えた学生有志がいた。彼らは同年6月、当会の前身となる「日ソ学生交流会」を設立した。当時はソ連に関する正確な報道も少なく絶対的な情報量が不足していたが、得られた僅かな情報を元にして毎週のように「ソ連とは、新生ロシアとは何か」と熱い議論を交わしていた。

当初2年間はモスクワを訪問し、とにかく現地の学生との対話をしようという意気込みの元に活動していたが、ソ連・ロシア激動の時代で交流先を見つけることすら困難だった。そのような中、財団からの助成金が一時打ち切れ、やむなく自費でモスクワへの渡航が2度実施された。格安航空券の無いこの時代に「学生が自費で」渡航するのに必要な資金集めに際しては、想像を絶する苦労があった。

1994年、厳しい状況が続く中、会員のカンパによって第1回訪日企画が敢行され、モスクワから1名の学生を招致することができた。

1995年は、当会にとって大きな転機の年になった。シベリア地域最大の都市にして、ロシア第三の都市、ノヴォシビルスク市の学生と新たに定期的な交流事業が開始される運びとなったのである。ノヴォシビルスクには日本語を教えている高等教育機関が複数あるが、当時は主にノヴォシビルスク国立大学の東洋学部との交流を継続的に実施した。ここで、ノヴォシビルスクと当会の交友関係にいたる経緯も大変興味深く特筆に値する。1995年当時に当会の顧問を務めてくださった和田氏とフロロヴァ女史との出会いである。

和田氏は、第二次世界大戦で強力な軍事力を誇ったソ連に鮮烈な印象を抱いたことからロシアに関心をもっていた。そこで、長年に渡る金融マンとしての職業人生を引退された後は精力的にロシアの大学を回って日本語学習の指導をなさっていた。また、自ら多くの在日ロシア人留学生の身元保証人として活動されるなど、日ロ両国の架け橋になろうとご尽力なされた方でもあった。

あるとき同氏がノヴォシビルスクを訪ねた際、当時日本との交流が皆無に近かった同地で日本語を教えている教授がいると知った。その教授こそがフロロヴァ女史である。彼女はソ連邦成立直後の幼少時代に中国東北部へ亡命し、「満州国」に成り代わった同地の日本人学校に入学した。その後、高等女子学校まで日本語による教育を受け、フルシチョフ時代のソ連に帰国して大学で教鞭をとった。フロロヴァ女史の半生には常に戦争がついてまわった。

和田氏とフロロヴァ女史は、戦争の記憶という共通項で結ばれて意気投合し、両氏が仲立ちとなって日ロ間学生交流の芽を育もうということで意見の一致を見た。当時フロロヴァ女

史の勤務していたノヴォシビルスク国立大学に本会の姉妹サークルとして「東洋クラブ」を結成し、万全の受け入れ態勢が整ったところで第1回ノヴォシビルスク訪問事業が実行された。それまで一貫してきた「ホーム・メイド」の交流活動をモットーとして継続し、当会の活動を重ねた。

1996、97年は春先、桜の蕾がほころぶころに訪日企画を実施し、思い出作りには絶好の企画となった。築地の魚市場を訪れて市場関係者に突撃インタビューを試みたり、レンタカーを借りて富士山に登ったりと、バリエーションと新鮮さに富んだ活動を行った。日本の家庭を知ってもらうことを目的としたホームステイ事業を本格的に始めたのもこの頃である。訪日企画に際してはロシア側と「財団の助成金に関する覚書」に署名・調印を行うなど、組織としての関係強化について協議が重ねられた。また、失敗に終わってしまったが、ロシア極東地域のブリヤート共和国にあるウラン・ウデ国立大学との交流開始を模索した年でもあった。

1998年からはそれまで2期に渡って同年中に行なっていた訪日・訪日企画について、主に財政的理由からそれぞれ隔年開催とすることに決定した。当時の基本的な方針としては、訪日・訪日企画を隔年開催にする代わりに1回ごとの交流事業の規模を拡大し、ロシア側との間にこれまでと同等の交流密度を維持していく、というものであった。その具体的な表れとして、当会会員の実家に出向く「地方企画」など新企画が次々と打ち出された。訪日事業においても同様の路線がとられた。

1999年には新しい試みとしてモスクワ再訪問を行い、現地の学生(プレハーノフ記念経済大学内の国際学生交流サークルであるIAESTEのメンバー)との交流が再開した。

2001年の夏よりモスクワ郊外の街リャザンとの交流が開始された。ノヴォシビルスクとの交流も現地メンバーが大きく入れ替わり、さらに活動は充実した。

2009年、本会は前身の日ソ学生交流会時代も含め20周年を迎えた。この間当会からは長峯誠参議院議員をはじめとして広く社会で活躍する人材を多数輩出している。

2011年の春には嘗てから望んでいた関西本部を設立した。大阪大学・同志社大学の学生を主な会員としている。同年8月にはリャザンから4名を関西に招致して10日間の訪日企画を行った。同時に訪日企画も行ったため、1997年を最後に途絶えていた訪日・訪日企画の同時開催を果たす運びとなった。

2012年は関東関西2本部体制の中で4都市間同時交流という新しい試みを始めた。関東からノヴォシビルスクへ、関西からリャザンへ、また、ノヴォシビルスクから関西へ、リャザンから関東へ、と2つずつの訪日・訪日企画が実施された。この試みは現在も続けられている。

2013年3月には『日ロ学生シンポジウム』を行った。外部の方々を招いての斬新かつ大規模な企画を皮切りに、北方四島学生交流企画への参加など多岐に渡って活動が実施された。新会員を迎え会員数は関東本部だけでも50名にまで膨らみ、本会は量、質ともに飛躍的に発展を遂げる年となった。

2014年では新たな試みとして東京大学の学園祭である駒場祭での出店を行ったことで、本会の活動・ロシアのことについて一般の人に広く知ってもらえるきっかけとなった。

2015、16年には会員数が増加、これまでの主な参加大学である東京大学、東京外国語大学、上智大学に加え、慶應義塾大学や東京理科大学、法政大学など様々な大学から会員が集まるようになり、活動に活気が生まれた。

2017年には、2016年度に天候不順によりやむなく中止した北方領土への訪問を果たした。更には、2013年度に開催された『日ロ学生シンポジウム』を『ミチター』と改め再開する運びとなった上、駒場祭に加えて東京大学のもう一つの文化祭である五月祭へも出店を行い、活動の幅を大きく広げる事となった。

また、本年から当会の関西支部が「セーミチキ」として名を改め別組織として独立した。

2018年度も、北方領土に住むロシア人とのビザ無し交流、五月祭への出店、シンポジウム『ミチター』を開催した。また、新たな試みとして、ロシア語を勉強する高校生を招待したロシア料理会や、タタールスタン共和国の首都、カザンとの交流を目的とした「カザン班」の設立、活動を行った。

1. 2 関東本部について

関東本部は1989年に設立された日ソ学生交流会を前身として、現在に至るまでノヴォシビルスク・リャザンとの学生間交流を中心とした活動を行ってきた。近年は訪日・訪ロ企画以外にも、北方領土を訪問するビザなし交流への参加、駒場祭への出店など活動は多岐にわたっている。会員の中心メンバーは上智大学・東京大学・東京外国語大学の学部1、2年生だが、OB・OGの方々の努力もあり、早稲田大学・慶應義塾大学など様々な大学から参加を受けている。会員はロシア語が専攻・第二外国語の学生に限らず、ロシアやその周辺地域への関心、学生交流への興味などで当団体に入る者も多くなっている。また、今年度はOB・OGの活動への参加も積極的に受け入れた。ロシアについてのみならず団体活動に関する知識、経験に富んだOB・OGの参加は心強く、来年度もこの姿勢は継続することが見込まれる。

1. 3 これまでの主な活動

1989年 6月	日ソ学生交流会結成		
1990年 8月	第1回訪ソ企画	日本人13名をモスクワへ派遣	
1992年 8月	第2回訪ソ企画	日本人13名をモスクワへ派遣	
1993年 7,8月	第3回訪ロ企画	日本人をモスクワ・極東へ派遣	
1994年	第4回訪ロ企画	日本人をモスクワ・極東へ派遣	
	第1回訪日企画	ロシア人1名をモスクワから招致	
1995年 8,9月	第5回訪ロ企画	日本人7名をイルクーツク・ノヴォシビルスク へ派遣	
1996年 3月	第2回訪日企画	ロシア人学生8名・教師1名をノヴォシビルスク から招致	
	8,9月	第6回訪ロ企画	日本人10名をイルクーツク・ノヴォシビルスク へ派遣
1997年 3月	第3回訪日企画	ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致	
	8,9月	第7回訪ロ企画	日本人8名をノヴォシビルスクへ派遣
1998年 8月	第4回訪日企画	ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致	
1999年 8,9月	第8回訪ロ企画	日本人16名をモスクワ・ノヴォシビルスク へ派遣	
2000年 8月	第5回訪日企画	ロシア人9名をノヴォシビルスクから招致	
2001年 8月	第9回訪ロ企画	日本人10名をノヴォシビルスク・ リヤザンへ派遣	
2002年 8月	第6回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから7名、 リヤザンから5名招致	
2003年 8月	第10回訪ロ企画	日本人13名をノヴォシビルスク・ リヤザンへ派遣	
2004年 8月	第7回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから6名、 リヤザンから3名招致	
2005年 8月	第11回訪ロ企画	日本人10名をノヴォシビルスク・ リヤザンへ派遣	
2006年 8月	第8回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから5名、 リヤザンから9名招致	
2007年 8月	第12回訪ロ企画	日本人7名をノヴォシビルスク・ リヤザンへ派遣	

2008年 8月	第9回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから3名、 リャザンから10名招致
2009年 8月	第13回訪日企画	日本人13名をノヴォシビルスク・ リャザンへ派遣
2010年 8月	第10回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから7名、 リャザンから7名招致
2011年 5月	日本ロシア学生交流会関西本部発足	
8月	第14回関東本部主催訪日企画	日本人14名をノヴォシビルスク・ リャザンへ派遣
2012年 8月	第11回関東本部主催訪日企画	ロシア人10名をリャザンから招致
	第15回関東本部主催訪日企画	日本人5名をノヴォシビルスク へ派遣
2013年 8月	第12回関東本部主催訪日企画	ロシア人8名をノヴォシビルスク から招致
	第16回関東本部主催訪日企画	日本人10名をリャザンへ派遣
2014年 8月	第13回関東本部主催訪日企画	ロシア人9名をリャザンから招致
	第17回関東本部主催訪日企画	日本人10名をノヴォシビルスク へ派遣
2015年 8月	第14回関東本部主催訪日企画	ロシア人6名をノヴォシビルスク から招致
	第18回関東本部主催訪日企画	日本人8名をリャザンへ派遣
2016年 8月	第15回関東本部主催訪日企画	ロシア人6名をリャザンから招致
	第19回関東本部主催訪日企画	日本人10名をノヴォシビルスク へ派遣
2017年 8月	第16回関東本部主催訪日企画	ロシア人9名をノヴォシビルスク から招致
	第20回関東本部主催訪日企画	日本人10名をリャザンへ派遣
2018年 8月	第17回関東本部主催訪日企画	ロシア人6名をリャザンから招致
	第21回関東本部主催訪日企画	日本人6名をノヴォシビルスク へ派遣

第2章 2018年度の活動について

2. 1 年間活動概略

年月	活動
2018年 1月	冬訪日企画開催（サンクトペテルブルク）
2018年 2月	定例会開催
2018年 3月	定例会開催 関東関西合同合宿
2018年 4月	新歓活動
2018年 5月	定例会開催 新入生歓迎合宿 五月祭出店（東京大学） 広島訪問（北方領土ビザ無し交流）
2018年 6月	ロシア料理会開催
2018年 7月	定例会開催
2018年 8月	2018年度訪日企画開催（リヤザン） 2018年度訪ロ企画開催（ノヴォシビルスク）
2018年 9月	第二回学生シンポジウム『ミチター』開催
2018年 10月	定例会開催
2018年 11月	定例会開催 「ロシアフェス」の共同開催 冬訪日企画開催（サンクトペテルブルク）
2018年 12月	全体総会開催（予定）

2. 2 年間収支報告

(作成 会計幹事 中矢 優衣)

- 収入

項目	金額 (円)
前年度引き継ぎ	398,692
助成金	400,000
協賛金	41,100
会費	51,000
五月祭売上	178,800
計	1,069,592

- 支出

項目	金額 (円)
新歓補助費	182,547
新歓ビラ費	34,000
Tシャツ費	44,990
訪日補助費	450,750
Мечта (ミチター) 補助費	15,035
計	727,322

- 支出 (五月祭)

項目	金額 (円)
出店費	63,941
食材費	66,564

ドリンク費	25,370
雑費（軍手等）	2,011
移動費	1,530
計	159,416

2. 3 今後の展望

（文責 太田 就士）

前年度から引き継いだものには、弊交流会の運営権や幹事の仕事だけでなく、多くの問題点も含まれていました。その一つは、「訪日、訪ロ以外の活動時期の沈静化」でした。そもそも活動がそんなにならなから、会員も、参加する人も減り、活動自体も減って行くという負のループにハマっていたのです。

今年のわたしたちは「ロシアをもっと日本に広めたい」ということを軸に活動し、弊団体の会員の横の繋がり強めるというところを念頭においていました。約30年間続けてきた日本とロシアの交流の活性化はもちろん、「会」として存続するため、どのようにサービスを会員、非会員に提供し、どうやったら活動に参加してもらうことができるか、に思考を割き、試行錯誤を繰り返してきました。

「ロシア」という国を広めようとして、その全面に出していったところで「ロシア」を100%受け入れてくれる人はいないのが現状です。ロシアと聞いたら必ず人は身構えます。そんな状況の中私たちがまずしなければならないことは、活動に参加した人たちに「楽しい」「また来たい」、と思ってもらえるようにすることだと思いました。だから、この団体はロシアに興味のある学生が、ロシア人と交流できるといういままでの軸を保ちつつ、会員にとって一つの居場所であるようなコミュニティ的な要素も加えてきました。この団体が「ロシア」広める基盤であって欲しいという思い活動してきたからわたしたちにとって活動の沈静化による人の集まらなさは解決しなければならない最重要事項だったのです。

まずは前年度に引き続き、東京大学の「五月祭」への出店、ロシア関係就職促進シンポジウム「ミチター」の開催をしました。前者では、コーカサス地方の料理シャシリクとウ

オッカの販売をしました。結果、シャシリクは完売し、大成功に終わりました。「ミチター」も2月に開催された第1回の反省点を活かし、第2回の開催も成功となりました。

また今年、ロシア語を学習する高校生を招待して、ロシア料理会を開催しました。多くの高校生が参加してくださりました。彼らにとっても満足の行く会になったと思います。

さらに、近年のインターネットの発展に目を向け、前年度以上にSNSの更新を心がけました。今まで使用していた弊団体のホームページも、利便性やデザインなどを向上させるべく、新しいものを作成しました。

他にも、少しでもロシアへ行ける機会が増えてほしいという願いから、タタールスタン共和国の首都、カザンとの交流を開始しました。

また、冬訪日企画としてサンクトペテルブルクとの交流も開始しました。今年の1月と11月にサンクトペテルブルクから日本語を勉強するロシア人を受け入れ小規模ではありますが、企画として成功させました。

今後はカザンとサンクトペテルブルクが新たな訪日先として、会員へ提供できるよう努力していきます。

近年、日露間の交流や行事などが増えてきていると感じています。その中で、新しい団体や、イベントの開催なども生まれています。それを1つの目的として立ち上げられた団体であります。しかし、我々は1つの「団体」として活動しています。今後、他の団体とどれだけ差別化を図れるか、どれだけ上質なサービスを提供できるか、どのように会を存続させるのかも、考えていかなければならないと思います。どうすれば日本の人々に「ロシア」が届くのか、ロシアと日本一つの友好の架け橋になるべく今後も試行錯誤を重ねて行く次第でございます。

第3章 2018年度訪日活動報告

3. 1 訪日活動について

3. 1. 1 企画概要

- 企画名…第 31 回日本ロシア学生交流会企画 第 16 回関東本部主催企画
- 企画開催期間…2018 年 8 月 3 日～2018 年 8 月 14 日
- 主催及び企画…日本ロシア学生交流会 関東本部
- 共催…日本ロシア学生交流会 リヤザン支部
- 助成…公益財団法人 平和中島財団
- 企画日程

日付	活動内容
2018 年 8 月 3 日	お迎え
8 月 4 日	原宿、渋谷、ウェルカムパーティー
8 月 5 日	ファミリーデー
8 月 6 日	ディズニーランド
8 月 7 日	ディスカッション・ボーリング
8 月 8 日	鎌倉・コテージ泊
8 月 9 日	横浜
8 月 10 日	両国・スカイツリー・浅草
8 月 11 日	秋葉原・恵比寿・花火鑑賞
8 月 12 日	お土産の日・フェアウェルパーティー
8 月 13 日	お見送り

3. 1. 2 交流都市について

リヤザンはリヤザン州の州都である。面積は約 224km² で、モスクワの南東 150～200km、オカ川とトウルベジ川が合流する地点に位置している。平均気温は夏で 19℃、冬で-11℃となっている。人口は約 53 万人であるが、近年は高齢化が進んでいることから人口は減少している。鉄道や幹線道の交差点、空港、河港が存在することから交通の要衝となっている。

リヤザンの起源は年代記の 1031 年に記載されているリヤザン公国のペレヤスラヴリリヤザンスキーという街である。商業・軍事の中心都市から 13 世紀末には州都となった。1521

年にモスクワ公国に併合されてからは18世紀までモスクワ南東の防衛拠点となったのち、1778年にリャザンと改名された。

19世紀中頃までリャザンは行政、商業が中心であり工業部門の発展は僅かであった。しかし、19世紀末に鉄道が敷設されて交通の中心地となったことで工業部門も発展し、多くの工場が建設された。ソ連時代の5カ年計画によっても発展は進められ、現在でも機械、石油加工などが盛んな工業都市となっている。

リャザンは行政、文化、交通の中心であり、ラジオ技術、農業、教育、医科のような大学や研究所、劇場、博物館がある。旧市街には1059年建造のクレムリンのある地区に修道院や教会など数々の建造物が保存されている。

市街は1780～82年の総合計画で格子状に整備され、その後1968年の総合計画で住宅群や行政・社会施設が建設された。



(2017年度報告書より抜粋¹⁾)

1 参考文献

- 竹内啓一ほか編 (2016) 『世界地名大辞典 6 ヨーロッパ・ロシアⅢ』 朝倉書店
Официальный сайт Администрация города Рязани (2016) “Город Рязань” <<http://admrzn.ru/gorod-ryazan>>
“Общие сведения” <<http://admrzn.ru/gorod-ryazan/obshie-svedeniya>>

3. 1. 3 収支報告

(作成 中矢 優衣)

- 収入

項目	金額 (円)
助成金	400,000
口座	50,750
合計	450,750

- 支出1

日付	項目	内訳 (円)	人数 (人)	小計 (円)	備考
8月3日	バス代	1,000	5	5,000	羽田空港 — 東京駅
8月4日	ウェルカムパーティー代	8,000	6	24,000	
8月6日	ディズニーランド代	7,400	6	44,400	
8月7日	ボウリング代	1,270	6	7,620	
8月8日	高德院拝観料	200	6	1,200	
	コテージ宿泊代	4,100	6	24,600	
8月9日	長谷寺拝観料	300	6	1,800	

- 支出2

日付	項目	内訳 (円)	人数 (人)	小計 (円)	備考
8月10日	スカイツリー代	3,090	6	18,540	
8月12日	フェアウェルパーティー代	1,600	6	9,600	
8月3日 ～ 8月13日	謝礼金	10,000	6	60,000	
	交通費	10,000	12	120,000	
	食費	—	6	133,990	領収書より集計
合計 (円)				450,750	

3. 2 企画内容

3. 2. 1 主な企画内容

- ホームステイ

訪日したロシア人は日本人メンバーの家にホームステイした。ロシア人参加者は、日本とロシアの家庭の違いを知ることができる良い機会になったと思う。また、ホームステイ受け入れ者も様々な生活様式の違いを発見することが出来ただろう。

- ディスカッション

事前に日本人メンバーが考えたテーマに沿って2班に別れてディスカッションをした。日本人にとっては、ロシア語で自国のことを説明する、ロシア人にとっては日本語での発言、聞き取りなどの実践的な場になった。

- 都内散策・交流企画

外国人観光客に人気の、秋葉原、原宿、浅草に加え、日本の歴史的建造物が立ち並ぶ鎌倉なども散策した。新宿や横浜では、その土地に詳しいものが案内をし、ガイドブックだけでは行けないような場所へも行った。また、例年通りのウェルカムパーティー、フェアウェルパーティーに加え、コテージの宿泊など、気楽に交流ができる企画も用意した。フレンドリーなロシア人が多かったためか、皆すぐに仲が深まったように感じられた。

- 報告書の作成

今年度の訪日企画によって当会員やロシア人メンバーが得たものや感じたものをまとめ、本活動の意義について報告するため、本報告書を作成する。

3. 2. 1 参加者

- 関東本部

氏名	大学名	学年	氏名	大学名	学年
鈴木陽介	法政大学	4年	鈴木大己	上智大学	2年
古川怜雄	上智大学	4年	鈴木雅美	上智大学	2年
池谷嘉将	法政大学	3年	戸瀬知実	東京大学	2年
石井廉史郎	上智大学	3年	中野晃輔	慶應義塾大学	2年
海内将利	法政大学	3年	中矢優衣	上智大学	2年
佐藤玲菜	早稲田大学	3年	久永ロバート	慶應義塾大学	2年
須藤瞳	津田塾大学	3年	松浦瑠希	早稲田大学	2年
新井颯太	東京大学	2年	荒木颯平	上智大学	1年
今泉裕夢	上智大学	2年	市原冴子	上智大学	1年
太田就士	慶応義塾大学	2年	小林陽	上智大学	1年
小笠原葵衣	上智大学	2年	重竹日菜子	上智大学	1年
小川美月貴	創価大学	2年	三角洋人	上智大学	1年
梶原緋奈乃	上智大学	2年	渡邊愛里子	上智大学	1年
杉本恵理佳	東京大学	2年			

- リヤザン支部

氏名	身分	受け入れ者名
Анастасия Князева Anastasia Knyazeva	リヤザン国立大学 学生	小笠原葵衣 梶原緋奈乃
Валерия Котова Valeria Kotova	リヤザン国立大学 学生	鈴木大己
Виктория Ануфриева Viktoria Anufrieva	リヤザン国立大学 学生	鈴木大己
Виктория Ганжтна Victoria Ganzhina	リヤザン国立大学 学生	小林陽
Елена Новикова Elena Novikova	リヤザン国立大学 学生	中矢優衣
Наталия Голунова Nataliia Golunova	会社員	杉本恵理佳

3. 3 報告

3. 3. 1 各日の報告

(文責 広報幹事 松浦瑠希)

- 8月4日

14:00～ 原宿散策（竹下通り、明治神宮）

16:30～ 渋谷散策

19:30～ ウェルカムパーティー（焼き肉）

当日はとても暑い日であったが、参加した日本人、ロシア人メンバーの皆は、暑さに負けない笑顔を見せてくれた。ホームステイ受け入れをしているメンバーからは、とにかく歩いてばかりで大変という話も聞いた。しかし、ロシア語の名前をつけてもらい、既に仲良しになっているようで安心した。

ウェルカムパーティーの間は笑顔が絶えず、とても楽しかった。また、大学では学ぶことが出来ないロシア語のスラングなど知ることもできた。



- 8月5日 ファミリーデイ

受け入れ先でそれぞれ自由行動

みなそれぞれ楽しんでいるようだった。メンバーの写真を見ていると、今年の私のファミリーデイを思い出した。日本人からは魅力のないように思われる場所が、意外と外国人にとっては人気なことがある。そのように、惹かれるものの類似点、相違点について知ることができるのも訪日企画の魅力の1つであると感じた。

- 8月6日 ディズニーランド

9:00～ ディズニーランド

ロシア人は人混みが苦手とよく聞くため、満足するの少し心配であった。しかし、集合写真等を見ると皆笑顔であったため、それは杞憂に終わった。

ロシアにはディズニーランドーのような大きな遊園地が少ないと思う。だから、自国では味わえない珍しいアトラクションに乗ったり、遊園地ならではの浮かれた雰囲気を感じたりなど、たくさんの新しい経験ができたと思う。

- 8月7日 ディスカッション、ボーリング

13:20～ ディスカッション

15:00～ボーリング

台風の影響で天気が悪く、当初予定していた新宿御苑の散策ができなくなってしまい残念であった。しかし、その代わりにボーリングをロシア人達と楽しむことが出来た。それだけでなく、ボーリングをしながら、ロシア人の時間の使い方について知ることもできた。

ディスカッションでは、ロシア人と日本人の価値観の相違や、子供の頃の遊び、互いの言語についてなど、様々な意見を聞くことができた。



- 8月8日 鎌倉

10:00～ 鶴岡八幡宮

11:30～ 小町通り、昼食

13:00～ 高德院

14:00～ コテージ到着後、海岸付近散歩

15:30～ 江ノ島

17:00～ コテージ泊

台風と直撃してしまったのがとても残念であった。とにかく風が強く大変な一日になった。しかし、鎌倉の美しい街並みをロシア人と共に観察したり、江ノ島からの景色を見たり、美味しい海鮮料理を食べたりと、その辛さを忘れるほど思い出に残る一日になった。

また、若者言葉、話し言葉のボキャブラリーが急激に増えた日でもあった。このようなスラングを気兼ねなく言い合えるということは、互いの仲がとても深いという証拠でもあると感じた。



- 8月9日 横浜

10:00～ コテージチェックアウト

10:30～ 長谷寺

12:00～12:30 小町通り

13:00～ 横浜駅到着、昼食

14:00～17:00 コスモワールド、赤レンガ倉庫

18:00～ 中華街、食べ歩き、夕食

19:00～ 山下公園、大さん橋

昨日から連続の、コテージでの宿泊で、ロシア人と日本人の仲をより深めることができたと思う。横浜では、駅から中華街まで徒歩で向かったが、日本人の殆どは疲れ切っていた。また、前日までは疲れた様子を見せなかったロシア人も、数名、流石に中華街散策後に疲れを訴えていた。

- 8月10日 両国、スカイツリー、浅草

12:00～ 江戸東京博物館

13:30～ 駅付近で昼食

14:00～ 旧安田庭園

15:30～ スカイツリー

17:00～ 浅草



前日、疲れた様子だったロシア人達の体力が戻っているようで驚いた。移動は

基本徒歩だったため、普段はみないような景色を見ることもできた。また、歩いている間ロシア人はよく会話をしているが、散歩というよりも会話の時間なのかも知れないと感じた。

- 8月11日 秋葉原、恵比寿

13:00～18:00 秋葉原自由散策

18:30～ 恵比寿ガーデンプレイス

19:30～ 花火鑑賞

この日を通して私は、食の違いを感じた。ロシア人はとにかく甘いものが好きである。カフェで、ロシア人が、とても甘い飲み物を一番大きいサイズで頼んでいて驚いた。レストランでの注文にも違いはあった。飲み物に関して、日本人はお冷のみで済ませることが多い様な気がするが、ロシア人は飲み物を頼むことが多い印象を受けた。ロシアのレストランでは水が無料ではないことが原因の違いなのかと感じた。

- 8月12日 お土産の日、フェアウェルパーティー

～18:30 受け入れ先で各自お土産探し

18:30～21:30 フェアウェルパーティー

お別れの前日ということで、ホームステイを受け入れたメンバーは、少し安心したような、しかし悲しいような気持ちになっている様に感じられた。ロシア人

メンバーはそれぞれ、自分の欲しいお土産を購入出来ているようだった。また、フェアウェルパーティーもすべてのメンバーが楽しんでいるように感じられた。

(日本ロシア学生交流公式サイトブログ記事より加筆訂正)

- **日本・ロシアに興味を持ったきっかけ**

日本人には、高校、大学等で学び始めたことが、興味を持つきっかけという意見があった。

ロシアに関する本などをきっかけにロシア語を勉強することを選んだという意見もあった。

ロシア人側は、日本のアニメを見て興味をもった等があった。

- **子供の頃にやっていた遊び**

外遊びをしていたという点で、日本とロシアの子供の遊びは同じであった。また、鬼ごっこやサッカーをやっていたという点でも同じだった。

冬にスケートや、カントリースキーをするなど、ロシアらしい遊びをしていたという話も聞いた。

- **お互いの国の言語学習の課題**

ロシア語について日本人からは、各変化、動詞の変化など文法的な問題だけでなく発音や、単語を覚えにくいことなどが挙げられた。

一方ロシア人は、日本語について、漢字を覚えることと敬語が難しいという意見を聞いた。

しかし、英語よりも日本語の方が簡単であるという意見もあった。

日本語とロシア語のどちらが難しいかという話題では、日本人は日本語が難しいと、ロシア人はロシア語が難しいと、意見が真っ二つに別れた。

- **日本の好きなところ**

アニメなどといった文化や、道にゴミが少なく綺麗であるという意見があった。

しかし、東京の人が多いところはあまり好きではないと聞いた。また、ディズニーランドも人が多すぎて少し嫌だったと言う話も聞いた。

● 慶應義塾大学2年 太田 就士

去年、私は訪露企画に参加した際、一緒に都内を観光し、食事をして、心の底から楽しむことができた。あの時の一瞬一瞬が本当に楽しく、私にとってかけがえがないものだった。もっとというと、本当にロシアっていいな、もっと彼らのことや文化、もっといろいろな人に彼らの魅力を知って欲しいな、と思えた。間違いなく、今後の私の人生を左右するほどの体験だった。

今回の訪日企画を終えた後、ロシア人を含めた多くの参加者から、「とても楽しかった」という旨のメッセージをいただいた。

自分が去年の訪露で感じたことと同じもの、もしくはそれに近いものをロシア人日本人かまわず感じてくれる人が出てきて欲しいという思いでやっていたので、代表として今回の訪日企画に携わり、これ以上の喜びはなかった。

また、訪日企画の際、ロシアの文化の話、日常生活における領国の違いや将来の話、とにかく色々な話をした。「ロシアではこうだ」「日本ではこうだ」どちらかが口を開けばどちらかが衝撃を受けて目を光らせていた面白い光景は今でも鮮明に覚えている。それだけお互いに学びがありお互いの考えに触れることができたのは本当に貴重な体験であり、短期間ではあるがロシア人学生とつきっきりで時間を過ごすことができる環境を提供することができる日露学生交流会に出会うことができ、本当によかったと思う。

いつか日露の交流の架け橋になる私にとって、訪日・訪露企画でできた思い出は私の原点であり、一生私の宝物であり続けるだろうという確信に繋がった。

● 上智大学2年 小笠原 葵衣

大学でロシア語を少しかじる程度の私にとっては、当初、訪日企画は生のロシア語、ロシア文化に触れることのできる貴重な体験であるとともに、果たしてロシア人とコミュニケーションをとることができるのか、一抹の不安がよぎるものであった。しかし、ロシア人のアーシャは9月から日本に留学することが決まっていることもあってか、かなり流暢な日本語と英語を話すことができ、コミュニケーションの面ではほとんど苦労することはなかった。今年、日本では猛暑をふるっていたため、ロシア人が日本の気候に慣れることができるか懸念を抱いていたが、訪日に訪れたロシア人たちは元気に日本を満喫していたように思われる。アーシャと過ごす

時間はたったの4日間であったが、日本食と一緒に作って食べたり、夏祭りに出掛けたり、皇居を散策したりと密度の濃い時間を過ごすことができた。それと同時に、自身にとって、ロシア語の勉強になっただけでなく、ロシアの文化、同年代の同性の考え方に直に触れることのできた貴重な時間となった。ここで得た体験を今後のロシア語の勉強、及び自身の専攻の学習にも活かしていきたい。

- **上智大学2年 梶原 緋奈乃**

私は企画幹事として、この活動の計画から携わってきました。去年の夏、リャザンで出会ったロシアの人たちにたくさんの感動をもらったので、今度は自分たちが日本の良さを感じて欲しいという想いから、今年は訪日を計画しました。ロシアの人と同じ家で暮らして一緒にご飯を食べているときが私にとってとても嬉しい時間でした。日本食を美味しいと言って食べてくれるロシアの人たちを見て、お互いの文化を知ることにはすごく貴重な時間なのだと思います。日露学生交流会は本当にロシアの人と触れ合い、お互いを知ることができるとても良い機会を与えてくれるものだと思います。

- **東京大学2年 杉本 恵理佳**

私が受け入れたナターシャさんは今年の訪日プログラム以前にも日本に何度か旅行に来たことがある方なので、私は彼女が今まで見たことのないような日本の姿を見てもらえればいいなと思いました。彼女は日本のアイドルやアニメといったサブカルチャーには詳しくなかったので、ファミリーデーでは敢えて日本古来の文化を知ってもらおうかと思い、浴衣を着て川越の蔵造りの街並みを見に行くことを提案しました。個人旅行でしか日本に来たことがないナターシャさんにとって、浴衣を着付けてもらうというのは初めての体験で、さらに浅草などの王道の観光地からは少し離れた川越に行ったことで、日本の文化を新たな視点から見てもらえたかと思います。本人も喜んでくれて、とても嬉しかったです。自宅がある練馬区は、外国人がよく訪れる浅草や上野、渋谷などの観光地からは遠く、大都会の喧騒から離れた落ち着いた雰囲気、ナターシャさんもとても気に入ってくれました。個人旅行で日本に来るとどうしても観光地や繁華街の近辺にホテルを取りがちなので、日本に何度も訪れたことのある彼女にとっても、日本人の日常生活が垣間見れて新鮮だったかと思います。

- **上智大学2年 鈴木 大己**

10日間ロシア人2人のホームステイを受け入れました。受け入れたのが女性だったため、文化以前に男女の壁を強く感じました。あまり日本語が話せないロシア人たちであったため、初めはあまりコミュニケーションが取れませんでした。日が進むにつれてお互いロシア語や日本語でジョークを言い合ったりと言語の壁を超えて仲良くなることが出来ました。私は6日を除く全ての日程に参加しましたが今回日本に来たロシア人全員と仲良くなることができ、自らのロシア語の力も測ることができるいい経験になったと思いました。10日間ずっとロシア人と行動していたため、自身のロシア語の会話表現力の上達にも繋がりました。

また、連日とても暑い日々が続いていたためロシア人の体調を気にしていましたが、日本にいるという興奮からか誰一人熱中症にもならず健康に過ごすことが出来たことは本当に良かったです。ホームステイ受け入れて、金銭、体力的負担は大きかったです。結果的に大きな経験値と自信を得ることが出来ました。

- **上智大学2年 中矢 優衣**

昨年訪問したので、かなり距離が近い中での訪日でした。日本の文化を知ってもらうために日本語やロシア語を使って会話したのがとても楽しかったです。大学で学ぶロシア語以外にも日常生活で使うような言葉を直接同年代のロシア人から教わることができたのが良かったです。

- **早稲田大学2年 松浦 瑠希**

去年の訪露で私をホームステイ受け入れしてくれた友人達が、今年の訪日企画に参加するというので、ずっと活動を楽しみにしていた。去年の訪露で私は、ロシア文化や生活に興味を持った。それに対して、訪日で私は日本の文化に面白さを感じた。神社や寺、博物館、街、遊び場、食べ物など様々なものを紹介したが、特に印象深い場所は、鎌倉でたまたま訪ねたお寺である。その寺の中には、小さな神社があった。異なる宗教は相容れないことが世界では多いが、日本ではそれが共存してしまっていると考えた。そして、ロシア人に、そのように違う宗教であるが同じ建物ないにあることを伝えたが、そのとき同時に日本文化の面白さと難しさを強く感じたのだ。私は今年の秋から1年間ロシアへ留学をする。その際、日本のアニメやファッションなどのユースカルチャーだけでなく、訪日で私が感じた日本の面白さも伝えていきたいと思う。そして日露の交流の架け橋になっていきたいと思う。

- **上智大学1年 小林 陽**

10日間のホームステイ、訪日の企画は、教科書や授業でしかロシアのことを知らなかった私にとって、生のロシア人や文化を知ることができた、機会だった。また、わたしは勝手にロシア人は冷たい、笑わないというイメージを抱いていたが、訪日で来たロシア人たちはずっと笑っていたし、お別れとなると涙を流して「ありがとう」と言ってくれたり、炎天下の中の移動でつかれた私を気にかけてくれたりと、ロシア人はとても暖かい人たちなのだということがわかった。ロシア語を学び始めて半年の私にとって、意志の疎通はたいへんだった。ぜんぜん言っていることが聞けなかったし、理解できなかった。そんな中、先輩がロシア語を使って、ロシア人と笑いながら話をしていたのを見て、「くやしい!」「もっと内容のある話が見たい」と思えたので、これからのロシア語の勉強のモチベーションも生み出せた。こんな楽しくて、自分にプラスのフィードバックをもたらしてくれた訪日の企画は絶対に忘れられないし、来年も積極的に参加したい。

- **Анастасия Князева / Anastasia Knyazeva**

My name is Knyazeva Anastasia and I'm a second year student of Ryazan State University. This summer I've got a chance to go to Japan as a participant of the Nichiro students' exchange program. It was my first visit to Japan and it was unforgettable. Beginning with amazingly beautiful places we've seen and ending with kindness of our Japanese friends no one could remain untouched or unimpressed.

I would like to point out that the organization of the program was really well-thought of. Though 10 days isn't a very long time, we were shown so many breathtaking sights. Different places in Tokyo (Harajuku, Shibuya, Akihabara, Asakusa), a trip to Kamakura and Yokohama (where we stayed in a cottage for a night and had so much fun), a day in Disneyland. Everything was really well-organized. Everyone from the group of Russians agreed that there was a lot of effort put into the program and that we should learn many things from our Japanese friends when thinking of organization of this kind of activity. Also there is no doubt that this trip became a precious experience concerning language skills. The language barrier was taken down. Through the communication new knowledge was gained.

I'm enormously thankful to everyone who participated in this program and who made it possible for us to enjoy unique atmosphere of Japan. I'm really looking forward to coming to Japan again!

- **Валерия Котова / Valeria Kotova**

Every time you go abroad you worry: what will it be like? Will I get troubled during my journey? Will I have difficulties? What if I will feel disappointment or boredom? Spoilers: NOT AT ALL

If you ask common Russian what does he/she know about Japan the answer will be like “sushi, anime, Tokyo, kabuki, haiku, ikebana, origami... And Japanese are workaholics, they are very organized, pay attention at minor details and they always hide their emotions because they are decent people and many other typical stuff.” So, I was a bit worried: what if I will make bad impression (Because I am not quite organized, not very decent and don't hide my emotions at all)? So, first day I really tried behave myself as a good, shy and quiet person. But all my fears were vanished almost immediately. Japanese boys and girls met us very friendly and kindly. We started to trust each other from the very beginning and our conversations were full of smiles, jokes and fun. I find it beautiful: to overcome 7,5 thousand kilometers and meet not just nice guys but like-minded people and real friends despite the difference in cultures - it costs a lot for me

Vika and I live at Suzuki Taiki's home. First of all: thanks to him and his parents. We feel ourselves not like guests but we were a part of loving, friendly family. It means a lot and it costs a lot. And special thanks to Taiki's mother: this incredible and hospitable woman cooked delicious dishes for us. I've never eat such amazing traditional Japanese cuisine before in my life.

Next day after arrival we went to the central Tokyo, walking down the streets of Harajuku and Shibuya, and visited Meiji Jingu Shrine. Despite the crowds of people it was very interesting to look at buildings and roads and compare to our town. Some people say that all big cities are the same but Tokyo has absolutely particular atmosphere: history interwoven with high technologies in architecture, signboards, roads etc. Central streets always noisy and overcrowded but you quickly get used to it. In the evening we celebrated our arrival at the bbq-bar. It was very tasty and cozy evening.

Day 2 was the day of Sea and Tokyo Tower. Calm day full of laugh and amazing views (And I did so much photos, that the memory of my camera was run out. On the second day of the trip, yeah).

Disneyland. The dream of all boys and girls, no matter how old you are. We got there in the morning and came back home late at night. But we managed to ride on all the attractions and were very happy about it! Even the big queues had hidden dignities: we talked a lot, sang songs and study tongue-twisters in both languages. So, I can say that the day was a success.

Day 4. Very easy-going day. We took part in international conference, discuss different questions and problems. We tried to speak about everything: difficulties of studying Japanese and Russian languages, gave each other useful advice connected with pronunciation etc. We even had chance to compare Japanese and Russian's activities for children. And there was a surprise: we have many common games! And at that moment I realized: no matter how different our cultures are, we always can find something that will unite us.

Day 5-6 Weekend in Kamakura. Usually the middle of the journey you remember worse than the beginning or ending, but our trip in Kamakura is exception from this rule. I won't say much, just want my friends know: the most bright and funny and crazy memories gave me this trip. And I when I have a bad mood, I just remember those days and start smiling immediately. After Kamakura we went to Yokohama. We looked at modern cars, then we went to China town and tried some Chinese street-food (sorry, China, but Japan food is much tastier). And after sundown we went to the sea-quay and admired the view of the night city. After that we come back at home with Taiki's friends and organized "Jenga" competition, which was very funny to watch how guys became really enthusiastic about the game.

Day 7 Edo-museum, Asakusa, Tokyo Sky Tree. I really liked Edo-museum, huge wooden bridge inside the building will stay forever in my mind, that's really cool. It was very beautiful, some of the exhibits were interactive and that is more interesting than just to stare at them. Tokyo Sky Tree and Asakusa I visited before, but you never be bored to go at some place again when you with friends. And in the evening, we learnt how to make takoyaki (small piroshki with octopus). Oh, almost forgot! I also tried natto for the first time in my life that day. What I can say about the taste?... Unforgettable food.

Day 8 Akihabara. Ebisu Garden. Hanabi. Izakaya. Akihabara has a spirit of informal Japan, I suppose. Huge manga-shops, girls (and boys) in fancy dresses, lots of thematic cafés, cosplay-stores... In this place you never feel boredom. We walked there till evening and then went to Ebisu Garden to watch fireworks over the Tokyo. And after that we ask you seniors to show us izakaya. And the rest of evening we spent talking, laughing and trying common Japanese snacks and drinks. (I have to say that chicken skin is not a food, it is not tasty, so stop eat it, please).

Day 9 Shopping-day. Sayonara-party. The first half of the day we spent buying souvenirs in huge shopping-moll. We even got on some local festival and listen to a drum performance. After the shopping was over we went to the center and spend time all together. Party was full of crazy jokes, crazy food, crazy drinks and crazy fun. Japanese friends made a surprise for us – personal boards with small sheets of paper where they wrote kind words,

wishes and their impressions. It was so emotional and precious moment, I won't forget about it, thank you.

In the end, I want to say, that I am really happy. I have met such amazing people, I will be glad to see each of you again and again. So, I believe we will continue our friendship. I think this is the main aim of cultural exchange: to mix our cultures and to born something new and amazing. I think, we all did it.

- **Виктория Ануфриева / Viktoria Anufrieva**

Начну с того, что я очень благодарна за существование программы "Ничиро". С её помощью я смогла осуществить свою давнюю мечту. В начале, участвуя в этом мероприятии, я очень переживала по поводу того, как будет проходить общение с японцами. Все же разная культура, воспитание и взгляды, но по итогу все оказалось легче. В первый год, когда я была среди принимающей стороны я не очень много общалась с гостями - стеснялась сильно, но вот когда я сама стала гостьей в Японии, то увидев уже знакомых мне, немного расслабилась.

Была очень счастлива в первой свой визит оказаться в замечательной японской семье. Мне крупно повезло. Проводя время вместе, мы сближались всей компанией, было интересно смотреть на природу, культуру, общаться, шутить, узнавать новые слова и учить чему-то новому самой. Каждый день был особенным и оставил очень сильные приятные впечатления. Для себя я выделила особенное и любимое место - это Yokohama.

Я очень рада, что узнала о Японии чуть больше. С нетерпением жду начала следующей программы. Буду обязательно участвовать снова!

- **Виктория Ганжтна / Victoria Ganzhina**

この旅行の前に日本へ行ったことはありません。東京をはじめ見て、びっくりしました。なぜなら大勢の人がいたからです。そしてロシアと比べて気候が全然違いました。湿度が高いから、辛く感じました。でも日本はとても美しくて面白い国です。一番好きなところは鎌倉です。色々なお寺や神社がありました。この町にまた来たいです。このプログラムのおかげで、私は日本について多くのことを学びました。日本と日本人に対する見方が変わり、私はその国の文化をよりよく理解し始めました。

次に一番大切なことについて話したいです。日露のプログラムのお陰で、日本人の新しい友達をたくさんつくれ、去年、ロシアへ行った友達とまた会いました。私たちはとても楽しい日々を過ごしました。私はヒナタという男の子と一緒に住んで

いました。ヒナタの家へ帰ったときは毎晩、彼は日本人の興味深い事実を教えてくださいました。私は日本での生活について学びました。日本の若者の生活、彼らの趣味をよく理解しました。

私がこの旅行で気づいた最も重要なことは、私たちが非常に異なる国に住んでいるということです。しかし、私たちには似ている点もあります。映画に行ったり、ボーリングをしたりと、ロシアと日本の若者たちは楽しい時間を過ごせると思います。このように、我々は非常に異なっており、非常に似ています。

- **Елена Новикова / Elena Novikova**

2018年8月3日に私は初めて日本へ行きました。この旅行の前に他の国へ行ったことがありませんでした。去年ロシアに来た日本人の友達に会うのが嬉しかったです。この旅行の前に日本について本だけで読みました。日本に来た時、日本はきれいで、美しい国だとわかりました。まず、このきれいな国から帰りたくないと思いました。ロシアはぜんぜん違いますから、日本に住みたいと思いました。しかし、5日後、「どうして東京には大勢の人がいるですか??」と思いました。私にとって、この旅行は楽しくて、面白かったです。私達は日本人の友達と一緒にたくさんのお寺を訪ねました。一番好きな所はディズニーランドでした。あそこでとても嬉しかったです。私は日本にいる時友達の家で泊まりました。私達はたくさん話したり、楽しんだりしました。友達の名前はゆいです。ゆいは優しくて、かわいい女の子です。私たちは去年も一緒に住んでいました。いつかも一回会おうと思います。ぜひ一緒に楽しい時間を過ごすとしたいと思います

- **Наталия Голунова / Nataliia Golunova**

I am very grateful for chance to visit Japan again. That was wonderful 10 days. Special thanks go to the host family. It was amazing that I lived in a Japanese family. They are interesting and kind people. I really appreciate all they've done for me. I had an unforgettable experience. It was so lucky that I could stay in a Japanese house. This is the first time I have ever put on a kimono. The Japanese traditional breakfast has become for me a special. We were sitting on the floor to eat and watch Japanese TV shows. The whole thing was unusual.

I am really grateful to the guys who spent time with our Russian group. That time was fun. I'm glad that I had the opportunity to visit Yokohama. This was my dream for six years.

I am happy that I was able to visit Kamakura once again. Kamakura is a beautiful city and has a strong national flavor. I have the most pleasant memories of people who I met in Japan. I hope that I can keep in touch with them.

Japan has beautiful landscape and has its own culture. Every day spent in this country will be memorable. I will definitely come to Japan again. Thanks for all!

第4章 2018年度訪口活動報告

4. 1 訪口活動について

4. 1. 1 企画概要

- 企画名…第31回日本ロシア学生交流会企画 第21回関東本部主催企画
- 企画開催期間…2018年8月17日～2018年8月27日
- 主催及び企画…日本ロシア学生交流会 関東本部
- 共催…日本ロシア学生交流会 ノヴォシビルスク支部
- 助成…公益財団法人 平和中島財団
- 企画日程

日付	活動内容
2018年8月15日	出発
8月16日	ウェルカムパーティー
8月17日	中心地散策
8月18日	ガリレオサイエンスパーク、コスプレフェスティバル
8月19日	アカデムゴロドク、鉄道博物館、ビーチ
8月20日	動物園
8月21日	第二次世界大戦博物館、蠟人形博物館、白樺伝統工芸博物館
8月22日	飛行場見学
8月23日	ファミリーデー
8月24日	アトラクション、歴史博物館
8月25日	フェアウェルパーティー
8月26日	出発

4. 1. 2 交流都市について

今回の訪口企画で訪れたのはノヴォシビルスクである。

ノヴォシビルスクはノヴォシビルスク州の州都で、シベリアの中心都市である。モスクワの東3191km、西シベリア平原に位置している。平均気温は年間を通じて+0.2℃であり、7月で+19℃、2月で-19℃となっている。人口はロシア国内第3位の約158万人であり、近年もこの人口は増加を続けている。この街を中心に鉄道および道路が数方向に延びており、交通上の結節点となっている。

ノヴォシビルスクの起源は1893年にシベリア横断鉄道建設の過程で生まれたノーヴァヤデレヴニャという街である。その後何度かの名称変更を経て、最終的には1925年に新しいシベリアの都市という意味のノヴォシビルスクに名称変更された。

何もなかった場所でノヴォシビルスクが急成長したのは、シベリア横断鉄道とオビ川の水路が交差するという地理的優位性にある。街の創設から70年未満で人口が100万人を超えたのは世界でも最速で、ギネス記録にも認定されている。ソ連時代に政府がシベリア・極東における研究開発などの拠点として位置づけたことに加え、第2次世界大戦中には多数の工場や住民が疎開してきたことから、その発展は加速された。

ノヴォシビルスクはロシア東部のビジネス、商業・金融、工業、学術、文化の中心都市であり、シベリア連邦管区の行政・管理機能を有している。ロシアの都市でありながら資源採掘に依存せずに発展しており、工業的には航空機や原子力工業をはじめとする加工・知識集約型部門が中心である。1990年代後半からは商業も発展しており、2007年には巨大商業センターも開業した。

ノヴォシビルスク大学など多数の高等教育機関や研究所が集積している。街の中心から南28kmの場所にはアカデミーチェスキーゴロドク(アカデミー小都市)も存在する。

1990年に北海道札幌市と姉妹都市連携を結んでいる。



(2017年度報告書より抜粋²⁾)

² 参考文献

竹内啓一ほか編 (2016) 『世界地名大辞典 6 ヨーロッパ・ロシアⅢ』 朝倉書店
Official website of the city of Novosibirsk (2016) “General Information” <<http://english.novo-sibirsk.ru/>>

4. 2 企画内容

4. 2. 1 主な企画内容

- ホームステイ

当会の日本人メンバーがロシア人メンバーの家庭にホームステイをした。全員初めてのロシア訪問であった。また、ロシア人の家庭の生活も体験でき、忘れることの出来ない経験をすることができた。今回、私達を受け入れて下さったロシア人メンバーに心から感謝を申し上げたい。

- 都市散策、交流企画

公園や動物園と言った有名な観光地だけでなく、珍しい博物館や、体験施設など様々な場所を見学した。また、ロシア人メンバーの職場である飛行場を覗かせてもらうなど、訪口だからこそできる体験もあった。このような企画、散策等を通して相互に親睦を深めることができた。

- 報告書の発行

今回の訪口企画で日本人、ロシア人の双方のメンバーが学んだものをまとめ、本会の活動意義を伝えるために、報告書を発行する。

3. 2. 1 参加者

- 関東本部

氏名	大学名	学年
小笠原葵衣	上智大学	2年
新井颯太	東京大学	2年
今泉裕夢	上智大学	2年
鈴木大己	上智大学	2年
瀬戸里奈	上智大学	2年
坂口優斗	上智大学	1年

- ノヴォシビルスク支部

氏名	大学名	受け入れ者名
Александр Глебус Alexandr Glebus	ノヴォシビルスク 国立工科大学	新井颯太
Александр Шеболтаев Alexander Sheboltaev	フリーランスエンジニア	坂口優斗
Александра Ильина Alexandra Ilina	ノヴォシビルスク 国立大学	今泉裕夢
Андрей Зайцев Andrei Zaitsev	—	鈴木大己
Дария Иващенко Daria Ivashchenko	ノボシビルスク 国立大学	瀬戸里奈
Марина Стрельникова Marina Strelnikova	ノヴォシビルスク 国立工科大学	小笠原葵衣

4. 3 報告

4. 3. 1 各日の報告

- 8月16日 ウェルカムパーティー
- 8月17日 中心地散策
- 8月18日 ガリレオサイエンスパーク、コスプレフェスティバル
- 8月19日 アカデムゴロドク、鉄道博物館

(文責 鈴木大己)

北京で5時間のトランジットを経て、羽田空港から20時間ほどかけてノヴォシビルスクへ到着した。今回参加したメンバーは皆初めてのロシア訪問であったため、周りがすべてキリル文字であることに興味津々であった。訪日前半は、中心街の散策、シベリア鉄道や鉄道博物館の見学、日本のアニメのコスプレフェスティバルを見たりした。しかし、東京ほど観光地が密集していないため、のんびりした1日を過ごすことができた。道路が悪かったり、ホコリが多かったりすることに気がついたが、ロシア人も同じことを思っているようだった。文化の違いがあるが、コミュニケーションを上手くとれているようで良かった。



- 8月20日 動物園

(文責 瀬戸里奈)

朝10時頃に起床し、朝食を食べた。ロシアの朝食は主に乳製品であるようだった。その後、散歩をしつつ駅まで向かった。その後、マルシュルートカを利用して乗り継ぎをしながら、2時間ほどかけて動物園に向かった。マルシュルートカは日本の2倍ほどの速さが出ているように感じられた。動物園には、世界中から集められた動物がおり、4時間半ほどかけて2周した。その後、電車を利用し近くの公園へ向かった。家に帰ると、ホストファミリーがご飯を作って待っていてくれた。ロシアへの長期留学を考えている自分にとって、とても貴重な体験ができた。

- 8月21日 第二次世界大戦博物館、蠟人形博物館、白樺伝統工芸博物館

(文責 新井颯太)

訪日6日目は博物館巡りをした。最初にロシアの軍事に関する博物館へ行った。解説、展示共に充実しておりレベルの高い博物館であった。館長のロシア語による解説を中心に見学するスタイルはソ連時代から続くインツーリスト型観光のようであり、ソビエト時代から残る伝統を垣間見れたようで良かった。一般観光客もツアー

に参加し、解説を次々に英語へと訳してくれたが、とても流暢な英語であり、メンバー全員付いていくのが大変であるように感じられた。途中、館長から実際に武器に触れて写真撮影をしようという提案があった。鉄兜を被り、ライフルを抱えて記念撮影をすることが出来た。その後、蠟人形博物館へ向かった。プーチンなど著名な政治家の蠟人形だけでなく、それを作る過程や、帝政ロシア時代、皇帝が集めていた奇形児のホルマリン漬けの展示などもあった。現職の政治家でさえ博物館の展示にしてしまうロシアの個人崇拜文化は、日本人にとっては興味深いように感じた。他にも白樺伝統工芸の博物館に行くなど、ロシアの文化に多く触れた1日であった。

- **8月22日 飛行場見学**

(文責 今泉裕夢)

昨日と比べて気温が10度も低く、また雨にも降られてとても寒い日であった。ロシア人にとっても寒い日であったようだ。この日はロシア人メンバーの職場である飛行場を見学させてもらった。ソ連時代に使われていた飛行機や世界で一番大きいヘリコプターを見ることができ、とても貴重な体験をすることが出来たと思う。

- **8月24日 アトラクション、歴史博物館**

(文責 坂口優斗)

この日はかくれんぼとドロケイを組み合わせ、さらに暗闇の中で行うというスリリングなアトラクションに参加した。まずは、2つのチームに別れ、逃げる側である人間と、探す側である幽霊を決めた。幽霊側は人間を見つけた後に、その人の名前を正確に答えなければいけないというルールであった。しかし、暗闇で何も見えず、難易度はかなり高かった。市内のアトラクションとは思えない臨場感を味わうことが出来た。他には歴史博物館の見学をした。ロマノフ王朝時代から、帝政の終わりまでを進みながら学ぶ仕掛けであった。タッチパネル式のモニターや、最後には、360度モニターの部屋もあり、技術的にも優れたものを感じられた。



- 8月25日 フェアウェルパーティー

(文責 小笠原葵衣)

8月25日にロシア人と日本人でフェアウェルパーティーを行った。飲むことは出来なかったが、ウォッカのビール割を飲むことがロシア流であるらしい。日本人メンバーはオムライスをロシア人へ振る舞った。炊飯器がなかったため、鍋を使ってご飯を炊いた。ロシア人から好評を得られた。ロシア人メンバーと日本人メンバーでピアノとギターセッションが開かれるなど、大変優雅な時間を過ごすことが出来た。訪口が残り一日であるため、様々な物事について語り合い、皆の思い出がお触れだすとても素晴らしいパーティーになった。

(日本ロシア学生交流公式サイトブログ記事より加筆訂正)

- **上智大学2年 小笠原葵衣**

ロシアは、独自の芸術や文化を持つ、技術的にも文化的にも秀でた国である。今回の訪露企画に参加する前に、ロシアに対してこのようなイメージを抱いていた。ある種、イメージ通りの部分もあったのだが、私の固定概念は覆されることとなった。

私が最も驚いたのは道路の整備状況についてである。日本であれば、道路はコンクリート舗装が完全になされており、一日歩くだけで靴が泥だらけになることはない。しかし、ロシアでは道路整備がやや甘いため、車が通るたびに土埃がたち、複はたちまち砂まみれになってしまう。ほかにも、野菜をスーパーマーケットではなく、市場で売っていたり、鉄道に乗る際にはICカードなどは使用できず、コインを購入したりと、私が今までに訪れたどの国とも異なる物流、インフラ環境を持つロシアは思い描いていた技術的に発達したロシアのイメージとはかけ離れたものであった。

しかし、ロシアの文化には圧倒されるばかりであった。バレエ劇場はもちろんのこと、地震が少ないためか、何年も前の建築物を改築して住んでおり、街を歩いているだけでも様々な建築様式の建物を見ることができた。ほかにも、日本では見ることの出来ない展示品も博物館には展示されていたり、独自の祈りの文化、教会建築を持つロシア正教会があったりと、改めてロシア文化に強く惹かれた。

今回の訪露企画を通してある種、ロシアの文化的な輝かしい面と、技術的な面でのやや暗い面の双方を垣間見ることができたのではないかと思う。それを受けてもやはり私はロシア文化、ひいてはロシア人がすごく好きだ。普段、英語圏と日本の文化以外に触れることの少ない私にとって、今回の訪露は自分の見聞を広げることができたとてもいい機会となった。

- **東京大学2年 新井颯太**

日本人一般にとってあまり身近ではない一方で、北方領土問題の相手としてまごうことなき隣国であるロシアという存在の特異性が関心を引いたというのが訪露を志望した理由であった。実際に現地を訪れることで得るものは多く、ロシア人との生活を通じて日本人にとっての彼らに対する固定観念が覆されることが多々あり、また逆も真であったように見え、相互理解が深まるのを感じた。

特に興味深かったのは現地の若者との交流で、親切にも彼らの自宅に招かれお互いに様々な質問について質問を交わしたのが最も強く思い出に残っている。ロシア人の実際の生活の場の中、自分以外は全員ロシア人という状況で忌憚なく互いの政治について話し合う場を持つことは、このようなプログラム無くしては成立しえなかったと思う。

また以前からソ連の歴史に興味があったことから、かつてのソ連を知る中高年の人たちから当時の思い出や考えについて実際に聞くことができたのも非常に貴重な機会だった。

実際に現地で人に会うことで生の生活や文化に触れ、また多くの知り合いを得て新たにロシアと繋がりを有するに至ったのは真に有意義な経験であった。

- **上智大学2年 今泉裕夢**

今回の訪露企画は私にとって初めてのロシアを訪れる機会となりました。あまり情報のない土地である事と初めてホームステイを体験するという事での出発する前は若干の緊張はありましたが、この企画に参加していただいたロシア人はもちろんのこと、街の人々は優しい方が多かったです。また、日本とは違う町並みにも魅力を感じました。ノボシビルスクはロシアで人口が3番目に多い都市ですが、モスクワやペテルブルクと比べると英語表現が少なく、街でも英語はあまり通じません。しかしロシア語を大学で主に勉強している私にとっては英語に頼る事なくロシア語を使う絶好の機会となりました。まだ拙いロシア語ですが相手に自分の意志が伝わった時はとても嬉しかったです。滞在中は博物館やビーチなど様々な場所へ連れて行っていただきました。この企画のために前々から計画をしてくださったロシア人の方々には感謝をしてもし尽くせないほどです。私自身、来年以降留学を考えていますが今回の訪露は改めてそれについて見直す良いきっかけとなったと思います。訪露企画は貴重な経験になると思います。ロシアに興味のある人は来年度の訪露企画に参加することをお勧めします。

- **上智大学2年 鈴木大己**

今回の訪露企画が私にとって初めてのロシア訪問でした。今まで、日本に来たロシア人と関わる機会は多々あったものの、実際にロシアでロシア人に囲まれて生活するのは初めてだったのでとても得るものが大きい訪露になりました。ロシア第三の都市であるノヴォシビルスクは道もあまりきれいではなく、ホコリや虫が多い街

で街全体の印象はあまり良くありませんでした。日本と違い、ロシアは広大な土地を有するため、第三の都市といえどもまだまだ開発が進んでないと感じました。建築物は旧ソ連時代のフルシチョフ建築と新しい建築が混ざりあい、とても興味深い町並みでした。街のシンボルである大きなレーニン像を見た時、ロシアの多くの街でこのような大きなレーニン像があるのだとロシア人は教えてくれました。

今回ホームステイを受け入れてくれた人達は優しく、日本語或いは英語が話せたため、ロシア語が話せないメンバーも不自由なくコミュニケーションをとることが出来ていました。私もロシア語と日本語と英語を混ぜて話しましたが、ロシア語をもっと話せればもっとロシア人の深いところまで知ることが出来ると思い、今後のロシア語の勉強、ロシア文化、社会の勉強のモチベーションにもなりました。

- **上智大学2年 瀬戸里奈**

今回私は初めてロシアに滞在することになりました。以前、英語圏、ニュージーランドに一年ほど留学したことがあり、その時と同じように今夏もホームステイでした。

ロシア人と共に生活していく中で驚いたのは、ロシア人はとても親切であり、ロシアはかなりの親日国家であるということです。ロシア人はもっとビジネスライクな関係を築くことを予想していましたが、思ってた以上に温かい人達でした。また、英語圏に比べてロシアでは日本の文化や特徴が好印象で受け入れられていると感じました。訪露を通して、私がニュージーランドで体験して得た“外国”や“外国人”に対する概念がかなり変わりました。

英語は世界の共通言語であり、非常に重要であり、学ぶ価値のある言語であることは間違いありません。英語さえできれば、ロシア語なんて、とってしまったことがありました。しかし今回の訪露を通して、英語だけでは体験することのできなかった新しい世界や文化を知ることができました。ロシア語学科に入ってよかったと思える体験でした。

- **上智大学1年 坂口優斗**

上智大学1年の坂口優斗です。この感想文ではロシア訪問で感じた雑多な感想を述べていきたいと思っています。訪露以前の私のリアルな映像としてイメージできるロシアの姿は、モスクワとサンクトペテルブルクに絞られていました。テレビで紹介されるロシアは、ほとんどがこの2都市に限られているからです。そんな訳で

今回訪れた都市であるノボシビルスクの、飛行機から見えた景色は正真正銘、新天地と私には映りました。所感としては、のどかという言葉がふさわしいように思われました。私はその時、京都のような日本ではなく、モスクワのようなロシアではなく、ロシアのようなロシアが見られるのではないかと胸をはずませました。その期待は裏切られることはなかったと思います。私のホストが住んでいた住宅街は、あまり大きくはない地下鉄に隣接している庶民的な地域にあって、毎日市場で野菜や果物が売られていました。毎日ホストたちがノボシビルスクの観光地、それもほとんどロシア人しかいない観光地につれていってくれるのですが、そこにむかうまでのより市民的な空間が、私はロシアにいるということを実感させてくれたのです。

- **Александр Глебус / Alexandr Glebus**

この8月に日ロプロに参加しました。とても面白かっただね。現にシベリアの生活を見せたかった。私はロシアを見せたかった。日本人と一緒にノボシビルスクをよく散歩しました。名所を見学しながら面白くなりました。私の日本語のために友達と日本語で話すようになりました。

毎日ソタさんと政治について話しました。ロシア人の意見を知っていたかった。固定観念と違うの意見をしたいんです。日本お友達に暑いと寒いシベリアにあることがありました。先に暑い天気があったが、寒い天気が突然になりました。そのあとで喫茶軒に行き、コーヒーを飲んで温もって気持ちがよかったです。

ロシアに日本から来た人と話して面白かった。どうしてですか。理由がいろいろでした。ソ連の文化、ロシアの料理、歴史。日本人に話すのあとで日本へ行きたい。

- **Александр Шеболтаев / Alexander Sheboltaev**

My main purpose in participating Nichiro was to improve my Japanese talking skills, because until recently I was studying it by myself using various web resources and didn't really have a chance to speak. The first thing that surprised me was that almost all participants used polite speech, while my teacher said it isn't necessary for the Novosibirsk stage of the program, so I didn't practice it at all, speaking only casual language.

Even with my little knowledge of the language, I was trying to speak Japanese most of the time, switching to English only when I didn't know how to express my thoughts or didn't understand what the Japanese students talking. That said, I didn't really speak much during group activities, but was mostly listening to others. The interesting fact I noticed was

that quite often Russians were talking with Russians, and Japanese with Japanese, while I was expecting everyone to try using every moment to practice the language they are studying. I didn't really notice any difference in personality or mindset between Russian and Japanese participants, maybe because discussions I participated in were mainly about the languages themselves.

It was funny to spend time with Japanese students and even visit Novosibirsk places I've never been myself, but at the same time it was pretty exhausting mentally, mainly because of my lack of the language skills. By the end, I've managed to become more fluent in Japanese, but at the same time I've realised how much I still need to learn. Now I'm thinking about taking JLPT 4 this year.

- **Александра Ильина / Alexandra Iina**

今年日露学生交流会に参加しておりますよかったですと思います。大学で日本語と日本史を専門にして、自分の日本語能力を試してみ、日本人の友達を作りたかったです。

日本人がやってくる一か月前は緊張と恐怖が入り混じった複雑な感情でした。それなのに定日を楽しみにしていました。8月16日に日本人は来て、少し前文通しかしない私の家に泊ることになった裕夢さんと枚面し、少し話ただけでも、落ち着きました。夜はウェルカムパーティーの時みんなと紹介し合い、日本人が優しいというファーストインプレーションを受け、もっと話し合いたくなりました。毎日一人一人に話したり、故郷のいい点を見せたりするようにしました。みんなは優しい態度を取ったり、ロシアの文化、歴史、ロシア人の考え方に関心を持って大切にしたりしてくれて有難い気持ちになりました。その上、6人の4はロシア語を勉強していて時々ロシア語で声をかけることや会話することや新しい言葉を勉強する熱心にびっくりしたのに嬉しかったのです。そのおかげで日常会話は言語交換のようになって、面白かったです。

更にすべての参加者はユニークだし様々な趣味がありますから、いつでも話は面白かったまたは勉強になりました。文化の違いの話によって、日本のことだけではなくて、以前一度も考えなかった自国のことも考えさせ、もっと分かるようになったと思います。それはいい体験だったと確信しています。でも言語交流などよりいい友達を作ることができて嬉しかったです。日本人女子と相談したり、俳優や食べ物について話し合ったり男子と冗談もしたり、真面目な話もしたりして楽しかったと思います。それに私の家でホームステイしてくれた裕夢さんのおかげで日本人のことが少し分かるようになったと確信したいと思います。毎日自分より別の人を大

切にしたり、世話したりしたから心安い感じがしました。裕夢さんといいい友達になったと信じたいです。もしもう逢わないかもしれませんがみんなのこととこの夏休みを絶対忘れません。日露学生交流会の方達には心から感謝しています。

- **Андрей Зайцев / Andrei Zaitsev**

Not the first time I had Japanese guest, but this moment was really interesting for me and for my family. It was a good opportunity to make new connections, to speak Japanese, to share a new things between me and our guests. The time I spent with them brought me new experience.

Many topics to talk, many opinions to share, different points of view for same things. Culture, everyday life, education, art, music, movies. Sometimes it was difficult to understand each other, but i think we tried hard.

Places we visited were new for me too. Never saw Novosibirsk in this way. I hope, it was really funny and enjoyable adventure for us all.

- **Дария Иващенко / Daria Ivashchenko**

この夏休みでは、日ロに参加したことがあります。前は大変緊張しました。例えば、私の日本語は、わかりやすいか、どうかという心配がありました。そして、ノボシビルスクの観光はおもしろくなかったら、どうしたらいいのか。

前は、日本人は恥ずかしがりあだと思ったが、皆さんが来たら、すぐ友達になりました。一緒に歩きたり観光したりしながら、ロシアと日本の文化似ついてたくさんを習いあいました。その上、日本語を毎日使って、生かせるチャンスがあつて、よかったです。今、寂しくようになりました。速く皆さんと合いにいきたいです。

- **Марина Стрельникова / Marina Strelnikova**

I participated in the program "Nichiro" this year. I like Japan, Japanese culture and Japanese language, I wanted to get to know Japanese better, so I decided to take part in this program.

To be honest, I was worried, could we understand each other. Actually, everything was not as scary as I thought. I think that over these 10 days the level of my Japanese language, has improved a bit. Also, I stopped being embarrassed to communicate. It's a good experience to improve the skills of your Japanese language, try to understand other people and find new friends. I was glad to participate in this program, it was fun and interesting.

第6章 補足

6. 1 カザン班について

(文責 中野晃輔)

● カザン班

この度、日露学生交流会としてロシアとの交流を広げるべく新たな提携先との関係構築に励んでいます。

提携先となるカザン連邦大学はロシア国内でも東洋研究が盛んな大学で100人を優に超す数の学生が日本語を学んでいます。しかし、モスクワやサンクトペテルブルクなどの都市と比較すると、カザンでロシア語を学ぶ日本人の数は少なく、両者の間の交流は未だ少ない現状にあります。そのため、弊団体と当該大学との関係を構築することで、両国の大学生が実際に学習する言語を使いながら交流を行う機会を設け、お互いの文化に対する理解を促進する目的があります。最終的には両団体間で毎年「訪露」・「訪日」企画を開催することでオンラインのみならず、直接的な交流を行うことを目指します。

また、カザンを中心とするタタールスタン共和国はロシアの他の都市と比べて特異な存在です。同共和国はロシア連邦の構成主体でありながらも独自の憲法・大統領・言語を未だに固持しています。そもそもタタール人とはテュルク系の民族で中央アジアに住む民族と文化的類似性を持っています。彼らの大半はイスラームを信奉し、「ロシア人」とは大きく異なる民族的アイデンティティを確立しています。歴史的観点から見るとソ連のスターリン時代に日本に移民してきたタタール人が現在の東京ジャーミーの前身となるモスクを建設したこともありました。また、文化的な側面では「タタール語オリンピック」で日本人が連続して優秀な成績を残すなど、少しずつタタールの文化に興味を持つ日本人は増えてきています。産業の面でも、タタールスタン共和国はヴォルガ川の海運と天然資源に恵まれている影響で急発展をとげている都市であり今後日本企業の進出が増加することが予想されています。

100以上の民族が生活するロシアについて学ぶときにスラブ・ロシア以外の要素を捨象することは、文化の一端のみを見ていることを意味します。視野を広げるためにロシア連邦内で2番目に多い民族であるタタール人の文化を知ることは、今後ロシアと日本の橋渡しになっていくであろう学生にとって非常に有益であると信じています。

- 今後の展望

まず、カザンの日本語の授業と連携して定期的にインターネット経由で言語や文化交流を図ります。このインターネット交流を通じて10月下旬を目安に訪露のルートや日程、文化交流の内容を協議し具体的に決定します。また、来年度の夏にはカザンで日本語を学ぶ学生を招聘し、日本の文化を直に体感してもらうことを目指します。その際、関西のカウンターパート団体である『セーミチキ』とも協力しながら関東のみならず関西での文化交流を円滑に進められるように計画して行く予定です。

6. 2 料理会について

(文責 松浦瑠希)

- 料理会

以前から問題視されていた、「訪日、訪ロ期間以外の活動の沈静化」という課題を解消するために、大学の文化祭への模擬店出店に加えて、一般の方も参加可能である料理会を企画した。

今年度は6月に、ロシア語を学習している高校生とその先生を招いて料理会を開催した。高校生の希望も汲み取り、ピロシキ、ボルシチ、ロシアンティーを作った。ロシア料理を作る機会が高校生にはあまりないようで、皆興味津々で料理をしていた。また、高校生にとって、この会は料理を作るだけでなく、ロシアと関わっている大学生と交流する場にもなり、様々な話をしたり、質疑応答をしたりして、多かれ少なかれ彼らは影響を受けているように感じられた。彼らにとって印象に残る1日になったであろうと信じている。

当会員にとっては、ロシアや学んできたことについてアウトプットする良い機会になったと思う。昨年度の訪日企画や訪ロ企画に参加したメンバーは、高校生たちにそこで何を感じたか、どのような食べ物があり、何が異なっており、何が似ているかなどといった話をできたと思う。

- 今後の展望

今後は料理会を年に数回行えるようにしたいと思う。また、ロシアに興味のある大学生、高校生だけでなく、そうでない人も参加できるような工夫をしていきたいと思う。そして、弊団体の発信のための恒例行事の1つになるよう努力していきたい。

6. 3 セーミチキ（旧関西本部）について

（文責 松浦瑠希）

- **関東関西合同合宿**

当会とセーミチキ（旧関西本部）の協力体制の強化のために、合同合宿を開催した。今年は東京へセーミチキのメンバーを招待した。合宿では互いのサークルの優れている点や問題点などについてディスカッションを中心に活動をした。他には、両サークルの親睦を深めるためにロシア料理会を開催したり、東京の名所を案内したりした。議論を通して、普段は気づかないサークルの長所、短所などを両会が知ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。

すでに来年度の合宿の開催が代表同士で話されている。

- **今後の展望**

合宿を通して親睦を深める事によって、シンポジウム「ミチター」や計画中の「カザン訪口企画」などの協力を円滑に進めていけるようにしたい。そして、互いのサークルのさらなる発展を期待したい。

6. 4 その他の活動について

- 定例会

1ヶ月に1度程度の頻度で定例会を開催した。定例会では、活動の方針や、訪日企画の訪問先についての話し合い、訪日企画の参加者による感想の発表や、ロシア語を使ったゲームなどを行った。また、日本に留学をしているロシア人学生を招待し、日本人学生との交流の場になるようにも努めた。今後も、この形式を保っていききたい。

- 五月祭出店

東京大学の五月祭に「フクスナ屋」の名前で模擬店を出店した。今年度はコーカサス地方の羊肉を使用した「シャシリク」とウォッカカクテルを販売した。多くの学生や一般の方々に食べていただき、無事すべて売り切ることができた。この活動をきっかけに弊団体に入会したものもいる。他には、ロシア人学生等と知り合う場にもなった。今後も日露の主要なアウトプット企画の1つとして、模擬店の出店を続けていきたい。

- ロシアフェス

2018年度は、ファッションアートイベント『Be Vint-Age 2018』の一環としてロシアフェスを ItaCafe（ロシア人メイドカフェ）さんと共催することとなった。場所は代々木公園のけやき並木。ロシアフェス当日はシャシリクを販売した。多くのお客様に来店していただき、土日両日とも2～3時間で売り切れてしまうほどの大盛況だった。

その際に、多くのお客さんに「これロシアの料理なんだ！美味しい！面白い」と言ったことをたくさん聞けて、私たちの「ロシアを少しでも知ってもらい興味を持ってもらう」という目的が達成できて、大成功だった。

- 合宿

春に東京大学五月祭の準備を兼ねての新入生歓迎合宿を山梨県の河口湖のコテージで開催した。例年は11月に東京大学駒場祭の準備として秋合宿も開催しているが、今年はロシアフェスとの日程の都合上開催できなかった。合宿ではBBQやボ

ルシチ作りなどメンバーの親睦を深めることが出来る活動として機能している。今後も積極的に合宿を開催していく予定である。

第31期日本ロシア学生交流会 関東本部報告書

2018年12月発行

編集 日本ロシア学生交流会 関東本部 広報部

幹事長 太田就士

発行 日本ロシア学生交流会 関東本部

Email: nichiro@nichiro.jpn.org

<http://nichiro.jpn.org/>

主催：第31期日本ロシア学生交流会 関東本部

共催：第31期日本ロシア学生交流会 ノヴォシビルスク支部・リャザン支部

助成：公益財団法人 平和中島財団